

# 市民に求められるべき 2020 東京五輪の「みつめかた」とは

## －オリンピック憲章内容からの逸脱傾向に何を見出すべきなのか－

橋本 奈津希 (大分大学)

### 1. はじめに

オリンピック憲章を表明したクーベルタンは、以下のような「予言」を呈している。すなわち、「スポーツは有益とも有害ともなりえよう。スポーツは、…もっとも卑しい情熱をも目覚めさせてしまうのである」(マカルーン, 1988, p.23) と。

私たち市民は、2020 東京五輪の「何に」注目すべきなのか。オリンピックにまつわるインフラ整備、景気回復等といった、「卑しい情熱」に留まらない、アスリートを取りまく「気高い情熱」の享受はいかにして可能となるのか、本研究の趣旨はそこに存在する。

### 2. 研究方法

本研究においては、「卑しい情熱」に迫る目的から、オリンピックをはじめとした近代および現代スポーツ事情に関する批判的見解を呈する谷口源太郎(1996; 1997)の言説に迫った(文献研究)。また、「気高い情熱」に迫る目的から、元オリンピック選手2名(マラソンの宗茂氏、バレーボールの朝長孝介氏)へのインタビュー調査を実施した。調査は、2017年12月1日、12月12日に実施した。

### 3. 結果と考察

#### 1) アスリートの「気高い情熱」

宗氏は、自身が小学生だった1964年に東京五輪が開催された折、男子マラソンで活躍したアベベ・ビキラ選手や円谷幸吉選手に憧れを抱き、「将来自分たちもそうなりたいと思った」という。一方、1992年バルセロナオリンピック以来、12年間本選出場を逃していた男子バレーボール界に所属してきた朝長氏においては、「男子バレーボールは北京大会に出場しなければ終わると言われてやってきた。オリンピックに出場することが『義務』だと感じていた選手もいた」と話してくれた。

「気高い情熱」のみを以ってオリンピック出場を旨とした宗氏とは対照的に、朝長氏は各種の「プレ

ッシャー」を受けてきたことがわかった。

#### 2) マスメディアによる「卑しい情熱」存在

宗氏から得られた以下のコメントは、アスリートの「気高い情熱」とマスメディア(マスコミ)の関係性を考える貴重な内容であった。「選手時代の取材にはスポーツ記者が来ていた。しかし監督になると、スポーツ以外のメディア関係者(芸能等)が来るようになった。あなた何も知らないじゃないって気持ちになった」。

上記の内容他からは、アスリートを取りまく「商品化(タレント化)」傾向を象徴するものであり、クーベルタンの予言した「卑しい情熱」の表層化と理解したい。すなわち、現代においては、社会的に価値ある存在としてアスリート、そしてオリンピックを捉える傾向が加速している可能性が高いといえよう。オリンピック憲章からの逸脱傾向に違いない。

### 4. 結語

オリンピックは、スポーツの祭典であり、アスリートにとって「ハレ」の場(機会)に他ならない。そのような場(機会)に接するメディアにおいては、アスリート、さらにはスポーツ(競技)の本質を十分(以上)に理解したうえでの取材活動が当然求められる。2020 東京五輪に向けてスポーツに係るジャーナリズムの質的向上は不可欠な課題となりえよう。私たち市民は、「気高い情熱」への関心喚起とともに、シビアなメディア評価の視点が、いままさに求められている、と理解したい。

### 5. 主な参考文献

- 1) ジョン・J・マカルーン：柴田幸・菅原克也訳(1988)オリンピックと近代—評伝クーベルタン。平凡社。
- 2) 谷口源太郎(1996)スポーツの真実—迷走するスポーツ界の影と光。三一書房。
- 3) 谷口源太郎(1997)日の丸とオリンピック。文藝春秋。